

松江市文化財調査報告書 第117集

一般国道432号線道路改良工事予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 VII

小原遺跡

平成20(2008)年9月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

一般国道432号線道路改良工事予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ

こ ばら い せき
小 原 遺 跡



平成20(2008)年9月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

例　　言

1. 本書は島根県松江市八雲町1880-3、1885、1886-4、1891-4番地で実施した小原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は国道432号東岩坂バイパス改築（改良）工事に伴い、松江市教育委員会と財團法人松江市教育文化振興事業団が実施したもので、現地調査は平成19年4～5月にかけて財團法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課が担当した。
3. 調査組織は下記のとおりである。

依頼者　　島根県（島根県土整備事務所）

主作者　　松江市教育委員会

事務局　　松江市教育委員会 教育長　　福島 律子

　　タ　文化財課 課長　　吉岡 弘行

　　タ　　係長　　飯塚 康行

　　タ　　主任　　後藤 哲男

調査機関　財團法人松江市教育文化振興事業団

　　タ　　理事長　　松浦 正敬

　　タ　　専務理事　中島 秀夫

　　タ　　事務局長　松浦 克司

埋蔵文化財課　　課長　　廣江 真二

　　タ　　課長補佐　錦織 麟樹

　　タ　　調査員　　藤原 哲（調査担当者）

　　タ　　調査補助員　北島和子

4. 現地調査においては、島根県教育委員会から調査指導をいただいた。

5. 調査に関しては次の方々の参加を得た（五十音別・敬称略）。

小川真由美、角田ミヤ子、時安順子、秦岡富士子、細川信子、細田美智子、細田勇治、

細田美晴、松島春江、松本謙、吉岡永子。

6. 本書の執筆は藤原哲がおこない、北島和子がこれを補佐した。なお、第一章「調査に至る経緯」については松江市教育委員会文化財課による。

7. 遺構番号については遺構の種類を問わず通しナンバーでS-1から付したものである。

8. 本書における方位は主に磁北を、レベル値は海拔標高を表す。

9. 出土遺物は土器類が1/3、石器・金属器が1/2、錢貨が1/1である。

10. 本文で使用した用語のうち中世以降の土師器系統の素焼きの土器を上質土器とした。

11. 本書に掲載した写真は調査員が撮影した。

12. 発掘調査で作成した図面・写真および出土遺物は松江市教育委員会が保管している。

目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と環境	3
第3章 調査の成果	5
第4章 まとめ	14



第1図 八雲町位置図 (S=1/400,000)

第1章 調査に至る経緯

平成17年10月20日に島根県松江土木建築事務所長（現：島根県松江県上整備事務所長）から国道432号東岩坂バイパス改築（改良）事業地内の埋蔵文化財分布・試掘調査依頼書が提出された。

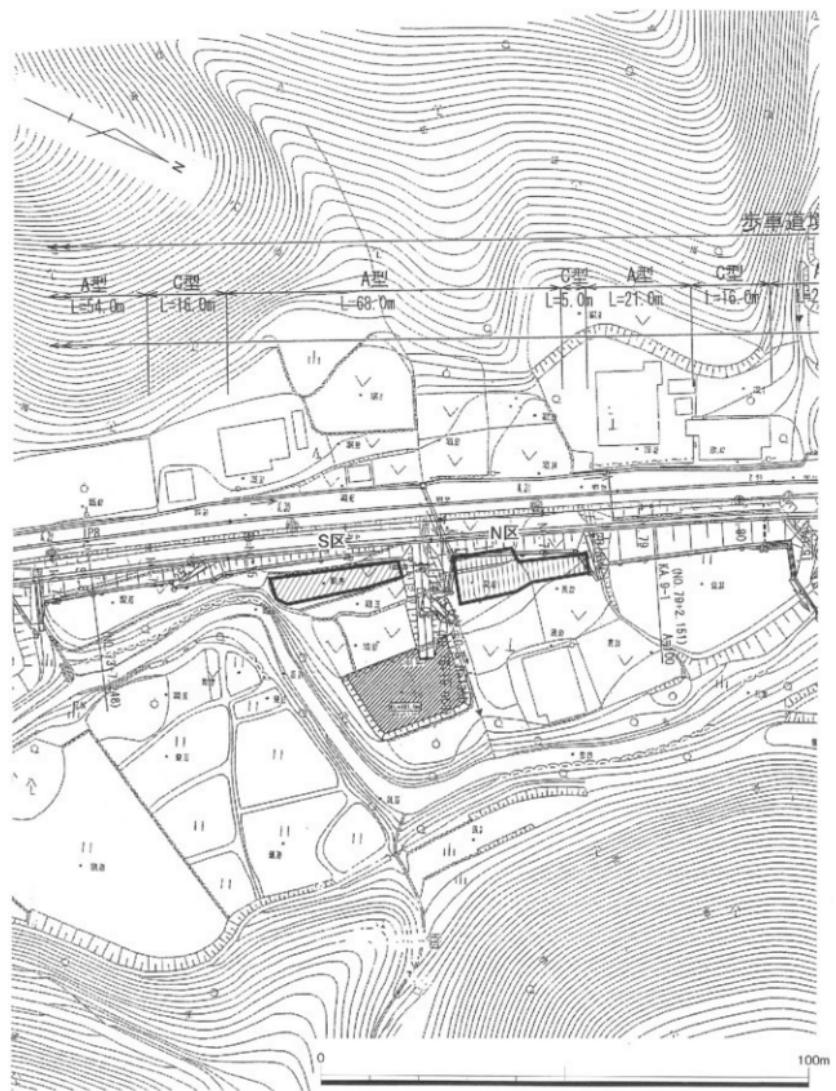
この国道432号道路改良工事予定地内の発掘調査事業は、平成6年度から八雲村教育委員会により継続的に実施されていたものであるが、平成17年の市町村合併後からは松江市教育委員会が調査事業を引き継ぐこととなったものである。これまでに八雲村教育委員会により7つの遺跡の本調査が実施され、6冊の発掘調査報告書が刊行されている。

今回の調査地は『別所間夏堂跡周辺の試掘調査必要箇所』として協議を重ねてきた場所であり、平成17年11月8日、9日、12月21日の3日間をかけて試掘調査を実施した。調査は1.5×3.0mトレーナー14本を任意の場所に設定し、重機により掘削を行った。調査の結果、当初想定されていた寺跡は検出されなかったが、東岩坂1891-4番地外において須恵器片や土坑5個を検出したため、当地の小字名を取り『小原遺跡』として文化財保護法上の手続きを行った。

この後、遺跡保護のための協議がなされたが、計画変更は困難との結論に達し、事前に発掘調査を実施することとなった。本発掘調査は財松江市教育文化振興事業団に委託して平成19年4月1日～平成19年5月30日の間に実施した。これにより、八雲町内の日吉神納橋から東岩坂駒返りトンネルまでの区間においては『星上山工区の分布調査』を残すのみとなった。



第2図 調査区位置図



第3図 遺跡位置図

第2章 位置と環境

小原遺跡は、島根県松江市八雲町に所在する。八雲町は松江市の南郊、東経133°、北緯35°、に位置している。町域は東西8km、南北10km、面積55.41km²であり総面積の80%が山林にある。村の中央を意宇川が北流し中海に注いでおり、これに流れ込む小河川が合流する下流域に平野が展開している。

八雲町内の遺跡は町の北側、川と平野を取り囲む地域に密集し下流に向かうほど密集する。これに反し南側の山側において遺跡密度は疎である。

小原遺跡が立地する八雲町東岩坂は八雲町でも南東部にあたり、標高454mの星上山に源を発する意宇川の支流である東岩坂川流域に概ね該当している。東岩坂、特に別所地区においては、現在まで周知の埋蔵文化財包蔵地はほとんど知られておらず、遺跡地より更に奥部に小深原遺跡、大佐平遺跡、遺跡地東方の星上山山頂には星上山五輪塔群、星上山城跡などが知られるに過ぎなかった。

一方、東岩坂でも北端の平野部、八雲町の北部平野地帯である日吉との境周辺では考古学的知見が増加しており、小原遺跡の北西4kmにあたる前田遺跡からは縄文晩期のドングリ貯蔵穴が見つかっているなど、縄文時代より人々の暮らしがあったことが伺われるに至っている。

弥生時代～古墳時代においても東岩坂北端では、近年、多くの遺跡が見つかってきているが、小原遺跡が立地する別所地区では周知の埋蔵文化財包蔵地が存在せず詳細なことは良く分らない。

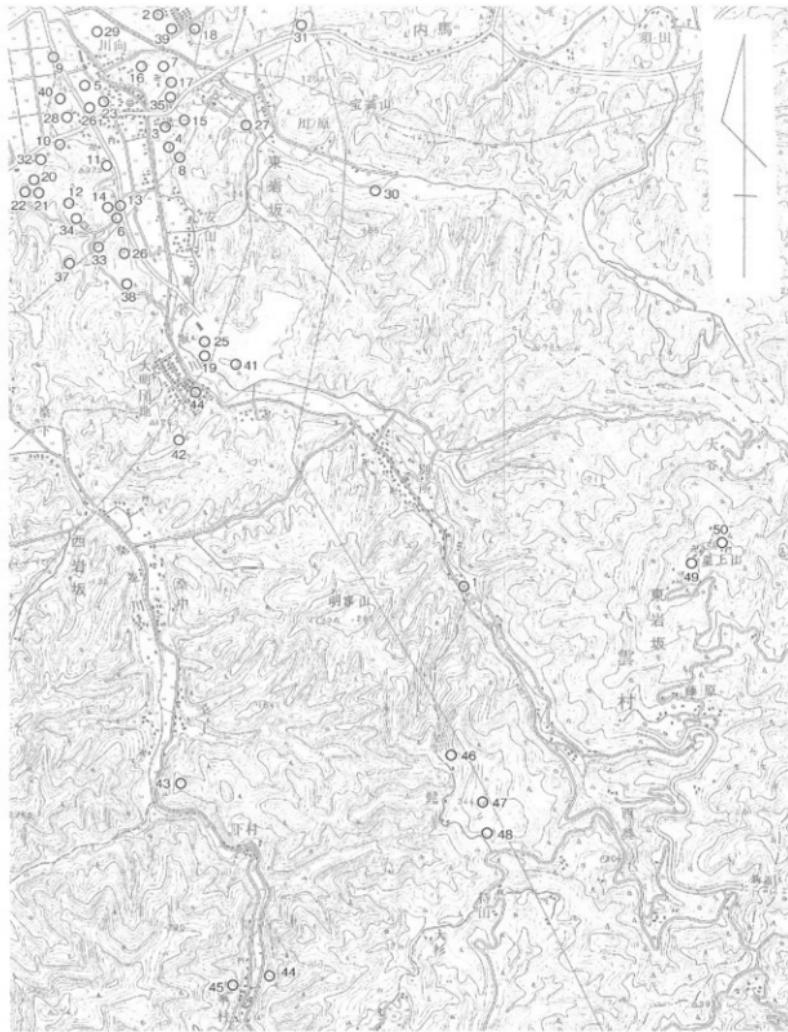
古代において八雲町は出雲国意宇郡大草郷に属し、東岩坂には那富乃夜神社、河原神社、毛社神社があるが、それぞれ「出雲國風土記」の那富乃夜社、河原社、毛社乃社とされている。

中世においては東岩坂と八雲町平原、日吉、西岩坂一帯には岩坂郷があったとされる。小原遺跡東方にある星上山頂には星上寺があるが、創建は古く寿永年間とも伝えられている。

江戸時代以降は堀尾氏治下から松江藩領として幕末まで至る。この間、和紙作成が始まったが、田畠の耕地に恵まれなかつたこの地の副業として、特に別所地区では和紙作りが盛んになるのである。

明治22（1889）年には町村制施行で意宇郡日吉、西岩坂、東岩坂の三村が合併して岩坂村となり、明治期を通しては模範村とされ発展を続けた。

昭和26（1951年）には岩坂、熊野二村と大庭村大字半原が合併して八雲村が成立、松江市のベッドタウンとして人口増加が続くほか、熊野大社や漉和紙雁皮紙の技術保持者として人間国宝にも指定された安部栄四郎の影響による観光客も多い。また、人口増加に応じて開発も進み発掘調査も進展しており、これまで知られていなかった新たな考古学的知見が蓄積してきている。2005（平成17年）には松江市、八束郡鹿島町、島根町、美保関町、玉湯町、宍道町、八束町との合併により松江市八雲町となり現在に至っている。



第4図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

- 1 小原遺跡
- 2 雨乞山古墳
- 3 四歩市横穴墓群
- 4 高丸横穴墓群
- 5 池ノ尻古墳
- 6 安田横穴墓群
- 7 土井古墳群
- 8 高丸古墳群
- 9 山崎遺跡
- 10 中山古墳群
- 11 谷ノ奥古墳群
- 12 北折原遺跡
- 13 安田古墳群
- 14 外輪谷横穴墓群
- 15 四歩市古墳群
- 16 増福寺塚山古墳群
- 17 増福寺古墳群
- 18 原ノ前横穴墓群
- 19 細田横穴墓群
- 20 祐定寺横穴墓群
- 21 祐定寺古墳群
- 22 折原横穴墓群
- 23 紙屋遺跡
- 24 舛谷遺跡
- 25 細田古墳群
- 26 松ノ前古墳
- 27 浜井場遺跡
- 28 中山五輪塔群
- 29 戸波遺跡
- 30 星敷谷五輪塔群
- 31 善三郎谷横穴墓群
- 32 祐定寺遺跡
- 33 折原上堤東遺跡
- 34 折原中堤北遺跡
- 35 増福寺横穴墓群
- 36 前田遺跡
- 37 折原中堤遺跡
- 38 折原谷縫跡
- 39 赤坂遺跡
- 40 中山遺跡
- 41 宮谷遺跡
- 42 真ノ谷遺跡
- 43 桑並城跡
- 44 ジャノ選五輪塔群
- 45 火事五輪塔群
- 46 小深原遺跡
- 47 西ノ谷遺跡
- 48 大佐平遺跡
- 49 星上山五輪塔跡
- 50 星上山遺跡

第3章 調査の成果

基本層序

調査地は、西側が道路（国道432号線）をまたいで丘陵部が迫っており、東は狹少な平坦面と接している。東に下がっていくと、すぐ傍らを東岩坂川が流れている。現状では、道路沿いには数軒の民家が立ち並び、調査地東側の平坦面は田畠として利用され、一部では石垣を設けて段々状の畑としているという、極めてどかな風景が広がっている。

調査地全面の表土は、10~20cm前後の層厚である旧耕作土（畑など）が覆っている。基本的にこの旧耕作土直下が地山面=遺構検出面であり、この地山面は黄褐色砂質土で、礫層と称してもよいほど多くの礫を含み、非常によく締まっていた。試掘結果等を参照にすると、黄褐色礫層より更に下には茶褐色や褐色の礫層（無遺物層）が続いている。

小原遺跡の基本層序はこのように単純であるが、石垣によって段々畑となっている西側のN区上段の高い部分には、地山とほぼ同じような黄褐色土が部分的に堆積している。また、南側のS区には遺構・遺物共になかったが、表土と黄褐色砂礫層との間には部分的に灰色シルト層などの堆積層（無遺物層）が見られた。

調査区の設定

小原遺跡の調査対象地は道路拡張部分に沿って細長く、畑や小屋へ通じる小道もあり、かつ段々畑などによる段差が石垣で設けられていたため、地形にそって調査区を「N区上段」、「N区下段」、「S区」と分けて調査を実施した。また、N区では多数のピット・土坑類が検出されたため、当初に廃土置場としていた部分も調査を実施し、これを「N区拡張区」とした。

N区上段

N区上段は調査地西側の一高場所であり、畑地に沿って石垣が築かれていた。このような地形であったため、盛土等の造成も想定して調査に入った。表土直下では礫を多く含む黄褐色土が見られたので、当初は地山層と考えたが、よりレベルの低いN区下段から多数のピット群が検出されたためにより更に掘り進めた。

その結果、地山とよく似た黄褐色砂礫層が盛土であると確認できたので、これと石垣とを撤去して遺構を検出し、ピット類と集石遺構（S-92）とを検出した。

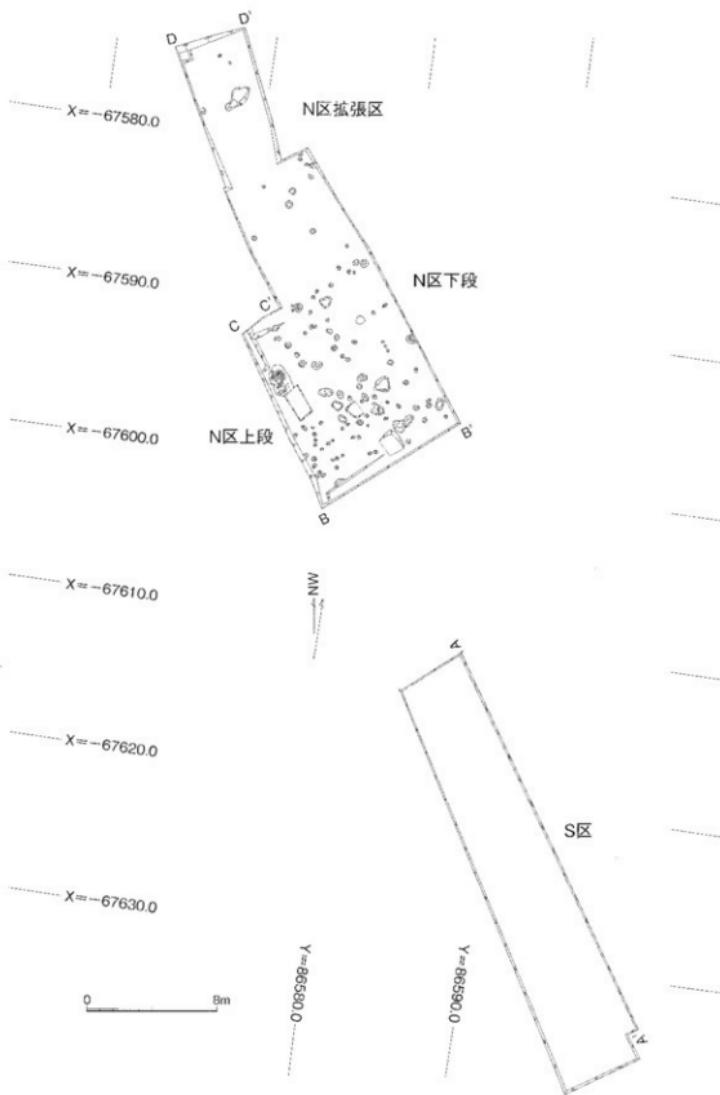
集石遺構（S-92）

N区上段西より検出した遺構で長軸3.9m、短軸2.5mを測る。長50cm大の大きな礫から10cm大の小さな礫まで大小様々な礫が遺構内に存在したが、礫の規則性は認められない。覆土からは炭も見られたが、検出面からの深度は最大で10cmほどと極めて浅い。

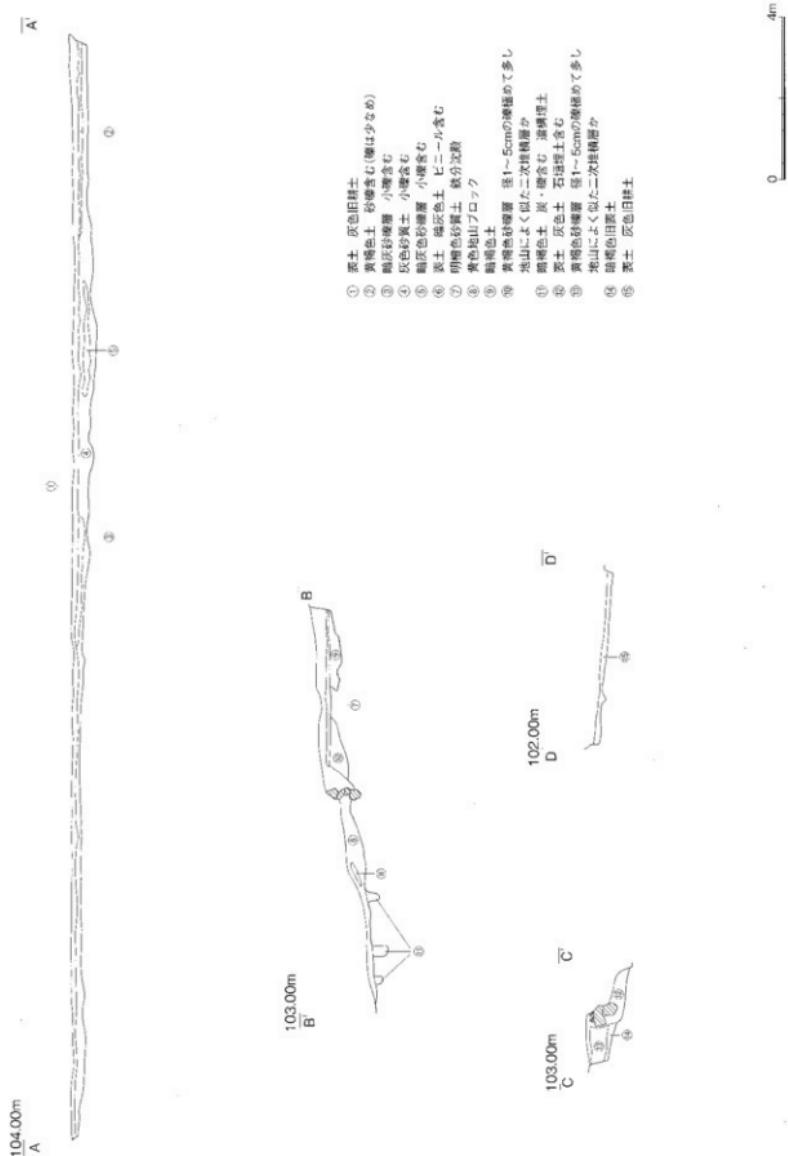
遺物としては黒曜石の錐（3）が1点出土している、調査当初は墓坑などの可能性も考えたため、遺構周辺の覆土も全て持ち帰り洗浄したが、黒曜石の微碎片1点を検出したのみであった。

N区下段

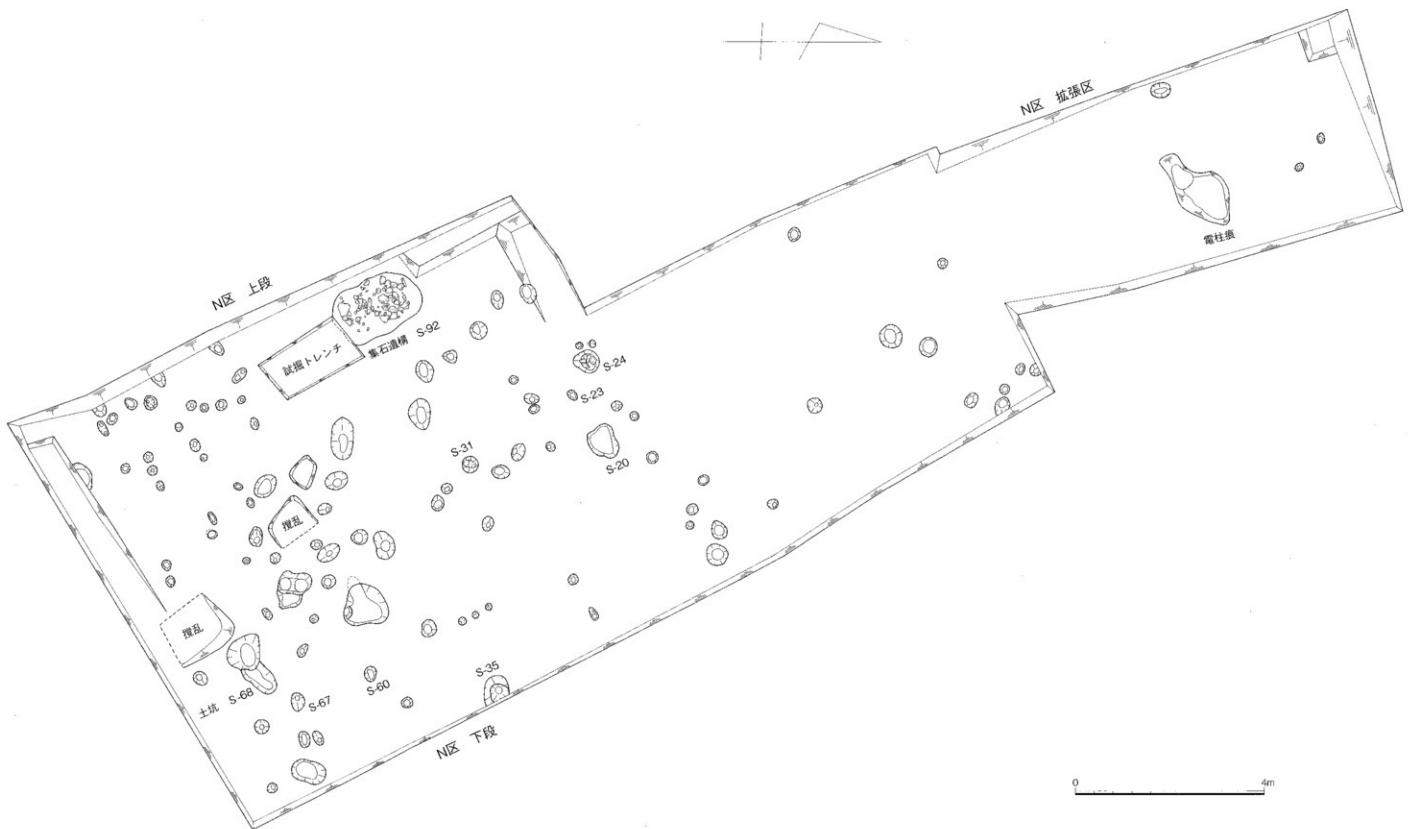
畑地で利用され比較的平坦であったN区下段では表土直下の浅い部分で、黄褐色砂礫層の地山が検出された。この地山面が同時に遺構検出面で、多数のピット・土坑類をこの面で検出した。このうち土坑S-68からは青磁・土師質土器皿・鉄釘・銭貨など比較的まとまった遺物を検出したが、



第5図 調査区位置図



第6図 土層断面図



第7図 N区調査成果図

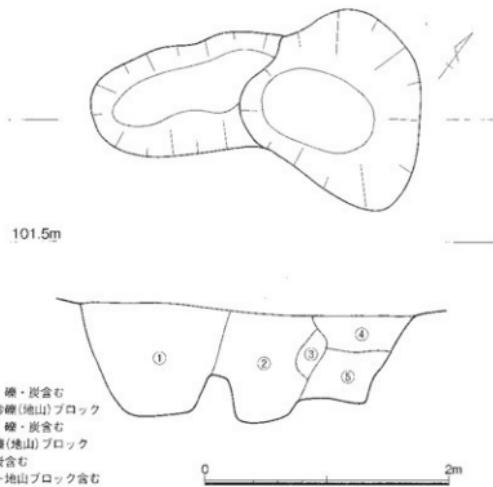


第8図 集石遺構 (S-92) 実測図

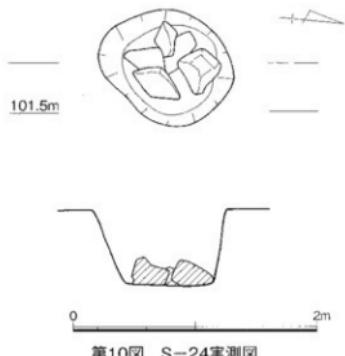
その他の小さなピット類の中にはほとんど遺物もなく、埋土も暗褐色土の単層であった。ピットから出土している遺物は黒曜石（14・16）と土師質土器皿（13）、須恵質播鉢（10）、陶磁器類（11・12・15）であり大部分が中～近世の建物に関連する小穴だと考えられるが明確な建物プランは明らかに出来なかった。

土坑S-68

N区下段の南端において検出した土坑で、2つの土坑が重なり合ったような状況であったが、本来的には同一のやや長細い土坑であったと考えられる。土坑の最大長は2.9m、幅1mを測る底面には凹凸が見られるが検出面からの深さは最深部で92cmを測る。埋土は暗褐色土が主であるが地山ブロックや繊維などが多く含んでいた。出土遺物としては青磁（4）、土師質土器皿（5～7）・



第9図 土坑S-68実測図



第10図 S-24実測図

鉄釘（9）・銭貨（8）などが見られることから墓抗の可能性が極めて高いと考えられる。

土坑S-24

N区下段の中央西よりにて検出した土坑で長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.6mを測る。遺構内底面から礫が数点検出されたが、その他の出土遺物は無かった。

N区拡張区

N区下段で多数のビット群を検出していたため、当初に廃土置場としていたN区の北側部分も調査を実施し、これを「N区拡張区」とした。しかし期待に反してN区拡張区では遺構がほとんど見られず、

現在の電柱痕である木柱を検出し、周辺からは銅線、鉄線などの破片を検出したのみであった。

S区

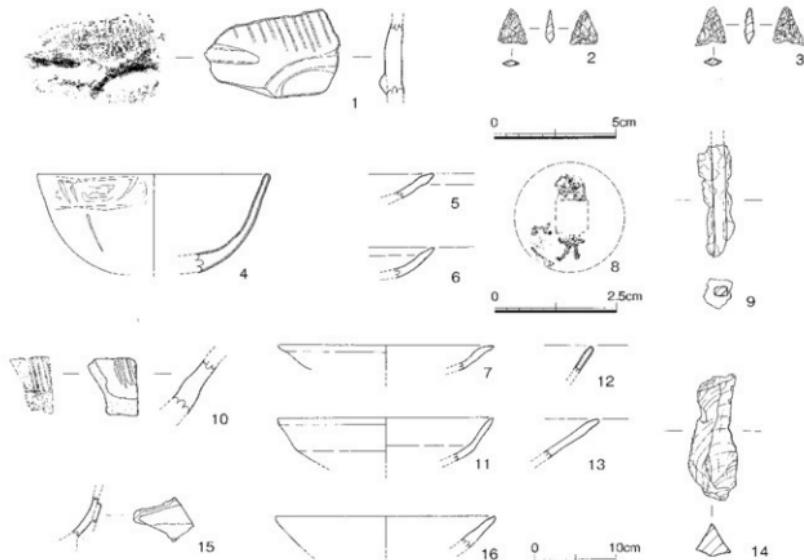
S区では試掘結果から遺構の存在が想定されたが、全面発掘の結果では遺構・遺物共にみられず、確認のため部分的にやや深く掘り下げたものの、やはり遺構・遺物共にみられたかった。

出土遺物

出土遺物は極めて少なく細片ばかりでコンテナ半箱にも満たない。図化できたのは16点のみである。1～2は包含層出土で1は縄文土器片、突芯とわずかな縦文が確認できる。2は黒曜石製の石鎌で長1.3cm、幅1.1cmを測る。3も同規模（長1.6×幅1.4cm）の小型の凹基無茎式の黒曜石製石鎌で、3の石鎌はN区上段の集石遺構（S-92）から出土している。

4～9はN区下段の上坑S-68出土遺物である。4は青磁碗で雷文と蓮弁文が確認できる、復元口径14.2cmを測る、14～16世紀の龍泉窯製であろう。5～7は土師質土器の皿で、7は復元口径13.2cmを測る。8は銭貨で「元」と「寶」の一部が判別できる。また同一破片と思われる「開」と読める細片もある。「開元通寶」か？9は鉄釘で残存長は4.5cm、断面形態は5×4mm程度の長方形である。

10は土坑S-23出土で須恵質の擂鉢、11はピットS-31出土の陶器片、茶褐色の釉をかぶる、復元口径は13.2cmを測る。12はピットS-60出土の青磁の小片、あまりに小さくて不明瞭であるが釉調の具合から龍泉窯製だと思われる。13は上坑S-20出土の土師質土器皿、14はピットS-67出土の黒曜石製剥片、15～16は土坑S-35出土遺物で15は陶器片、製作時の溶着を示すか、16は土師質土器皿の小片である。



第11図 出土遺物

第4章 まとめ

小原遺跡のN区からは表上・遺構面精査時のそれぞれから遺物が出土している。遺物の時期は大きく分けて縄文時代と中・近世の二時期であり、縄文土器片、黒曜石石鏃、剥片、青磁、陶磁器、銭貨、鉄釘などバラエティーには富むものの、量的には極めて僅かでコンテナ半分にも満たず、実測できたのも10数点に過ぎなかった。また遺構に伴うものも少なく各遺構との詳細な関連は不明瞭である。

遺物はこのように少なかったが一方、地山の堅固な砂礫層を穿って築かれたピットや土壙など、比較的しっかりした造構は多く、墓坑と考えられる造構以外の大部分のピット群は中・近世頃の建物跡だと考えられる。道路拡張部分の限られた範囲内では明確な建物プランを明らかにすることは出来なかつたものの、上の調査成果から、遺跡地周辺には中・近世頃に建物が並んでいたと考えられる。

この小原遺跡（N区）周辺の現状は畠地であるが、付近には五輪塔の一部も現存している、地勢的にはやや狭い場所であるが、丘陵と河川に挟まれた平坦地で、建物が立地するには良好な場所だといえよう。ピット以外にも青磁・土師質土器皿・鉄釘・銭貨が出土した七坑S-68や、縄文時代と思われる石鏃が出土した集石遺構（S-92）を検出したことも特筆しておきたい。

小原遺跡の位置する八雲町東岩坂は中世において岩坂郷があったとされる。小原遺跡東方にある星上山頂には曹洞宗星上寺があり、平安時代に国司の手厚い保護を受けて興隆をきわめていたが、平安時代末期には熊野神社檢校をはじめとする僧徒四千人によって火を放たれ40余院の塔頭全てが焼き尽くされたという。

星上寺に関する文献資料の信憑性、また本格的な考古調査が皆無であることなどから、上記のような伝承の真偽のほどは不明な点が多いが、小原遺跡のすぐ近くにある星上山が平安時代前後にかなりの賑わいを見せていたことは事実であろう。

また、戦国時代に入ると岩坂郷は富田城（安来市）に近接する軍事的な要所の一つとしてしばしば戦場となつた。特に富田城の尼子氏と、富田へと侵攻する毛利氏との間には激戦が繰り広げられ、八雲町内にもいくつもの城跡が残つてゐる。

このように、小原遺跡周辺には重要な歴史的事跡が數多く伝えられてはいるのであるが、考古学的な「周知の埋蔵文化財包蔵地」はほぼ皆無に近かつた。しかしながら周辺には「寺屋敷」や「里坊」という小字を持つ水田や畠地があり、隣接地には「問夏堂」という小字を持つ丘陵や多数の五輪塔が残されている場所も存在している。これまででは、これら伝承や地名、苔むした五輪塔などに、かつて興隆をきわめた星上寺の40余院の塔頭や戦国武将たちが戦つた幾多の合戦の面影を偲ぶばかりであった。

この度の発掘調査は、別所地域において初めて考古学のメスが入つたという点で極めて有意義な調査であった。調査面積が狭く、出土遺物も少なかったものの、縄文土器や石鏃、または14～16世紀の青磁や多数のピット群を検出し、縄文時代や中・近世の実証的な資料を得ることが出来た。この地域での調査に貢献するところが極めて大きいであろう。

写 真 図 版



調査前風景
N区（北から）



調査前風景
S区（西から）



N区上段前景
(南から)

図版2





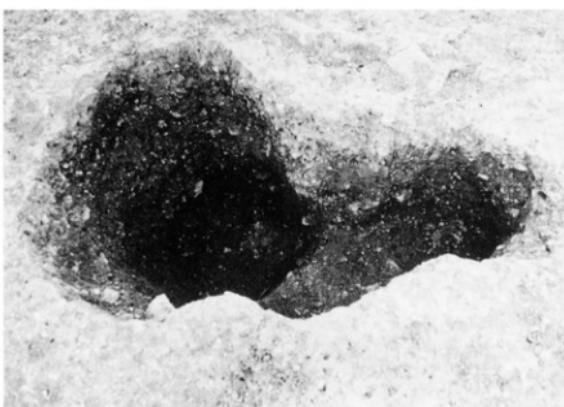
図版4



集石遺構 S-92



同上



土坑 S-68



S-20



S-24

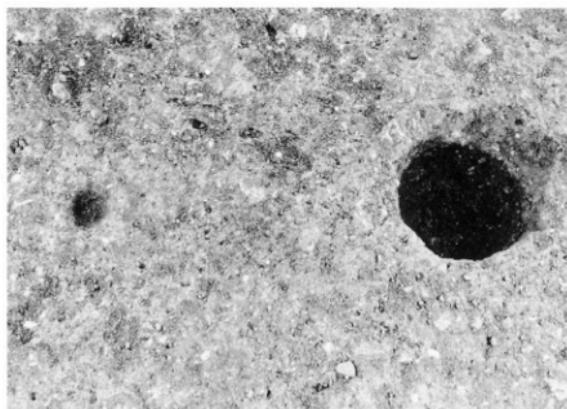


S-31

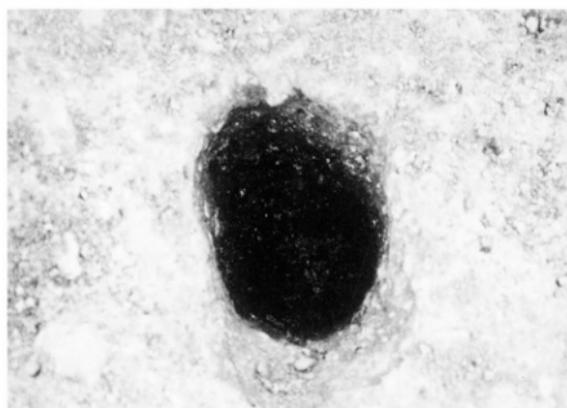
図版6



S-35



S-60



S-67



調査地周辺平坦部
左がN区
右下に東岩坂川



東岩坂川

図版8



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	こばらいせき							
書名	小原遺跡							
副書名	一般国道432号線道路改良工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	VII							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第117集							
編著者名	藤原 哲							
編集機関	松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団							
所在地	〒690-8540 糸根県松江市末次町86番地			TEL: 0852-55-5284				
	〒690-0101 糸根県松江市島根町加賀1263-1			TEL: 0852-85-9210				
発行年月日	2008年9月30日							
所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小原遺跡	島根県 松江市 八雲町 別所	32201	F-121	35° 23' 2221"	133° 07' 0757"	20070401 ~20070531	300m ²	道路工事
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
小原遺跡	散布地	縄文 中・近世	ピット 土坑 集石遺構	縄文土器 石器 土師皿 青磁 陶磁器 鉄器 銅錢				

一般国道432号線道路改良工事予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

小原遺跡

平成20(2008)年9月

発行 松江市教育委員会

島根県松江市本次町86番地

財團法人松江市教育文化振興事業団

島根県松江市島根町加賀1263-1

印刷 深高浜印刷

島根県松江市東長町902-57